



# 小学生の母子保健室登校を通した母子関係の変容と 援助プロセスモデルの生成

著者	藤井 茂子
発行年	2015
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2015
報告番号	12102甲第7507号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00134895">http://hdl.handle.net/2241/00134895</a>

氏 名	藤井 茂子		
学 位 の 種 類	博士（カウンセリング科学）		
学 位 記 番 号	博甲第	7507	号
学位授与年月	平成	27 年	5 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	小学生の母子保健室登校を通した母子関係の変容と 援助プロセスモデルの生成		
主 査	筑波大学教授	Ph. D	石隈 利紀
副 査	筑波大学教授	博士（心理学）	大川 一郎
副 査	筑波大学教授	博士（心理学）	濱口 佳和
副 査	筑波大学教授	博士（人文科学）	安藤 智子

## 論文の内容の要旨

### （目的）

不登校であった子どもが、母子保健室登校開始から教室復帰をするまでにどのように変わったのか、また母子関係はどのように変化したのかを明らかにし、「小学生の母子保健室登校における母子関係の変容と援助プロセスモデルの生成」をすることを目的とする。

### （対象と方法）

#### 1. 対象

母子保健室登校を経験した母親 17 名、母子保健室登校援助をした養護教諭 13 名、担任 5 名。

#### 2. 方法

養護教諭、担任、母親に対する半構造化面接の結果を、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析するとともに、二つの実践事例で援助プロセスの妥当性の検証を行った。

### （結果）

本研究で生成した援助プロセスモデルは、5つのステップで構成される。

#### 第 1 ステップ（プレ母子保健室登校）：【援助方針】適切な登校刺激

- ・子どもの様子：母親へのアタッチメント行動が顕著・母親から離れられない
- ・母親の援助：担任などに相談・子どもを連れて登校
- ・養護教諭の援助：校長への情報提供と相談・保健室登校の受け入れ準備
- ・担任の援助：子どもや母親への登校の促し・保健室登校の受け入れ態勢づくり

#### 第 2 ステップ（母子保健室登校初期）：【援助方針】母子の受け入れと学校組織への働きかけ

- ・子どもの様子：母親と共に保健室に登校・母子分離不安の減少
- ・母親の援助：子どもの状況の受容・子どものアタッチメント行動の適切な受け止め
- ・養護教諭の援助：母子の受け入れ・母親の話の傾聴・学校組織への働き掛け

- ・担任の援助：養護教諭との情報交換と援助方針の共有・学校組織へ働きかけ

### 第 3 ステップ（母子保健室登校中期）：【援助方針】母子分離を図る援助

- ・子どもの様子：母子関係の再構築・母子分離不安を解消・養護教諭との関係性の構築
- ・母親の援助：母子関係の再構築
- ・養護教諭の援助：母親や担任と連携した援助・母子と担任や級友との橋渡し
- ・担任の援助：養護教諭や母親と連携した援助・母親との信頼関係の構築・級友とのかかわりの橋渡し

### 第 4 ステップ（母子保健室登校後期）：【援助方針】保健室からの自立に向けた援助

- ・子どもの様子：担任との信頼関係の構築・級友との関係性の構築
- ・母親の援助：教室復帰に向けた子どもへの援助
- ・養護教諭の援助：子どもの自立を目指す援助・子どものアタッチメント対象としての役割
- ・担任の援助：子どもを教室で受け入れる態勢づくり

### 第 5 ステップ（ポスト母子保健室登校）：【援助方針】自立に向けた援助

- ・子どもの様子：自立した母子関係・担任をアタッチメント対象とする前向きな変化
- ・母親の援助：養育態度の変化
- ・養護教諭の援助：子どもの見守り・母親への情報提供
- ・担任の援助：子どもを教室で受け入れ・子どものアタッチメント対象としての役割

#### （考察）

#### 1. 母子保健室登校の母子の特徴と不登校要因

プレ母子保健室登校の母親の子どもとのかかわりの特徴として、過保護、指示命令的、子どもに対する不安などが挙げられた。また母親は不安傾向があり、子どもにも同様の傾向が見られた。子どもは学校生活のストレスから母子分離不安が高まり、不登校になったことが考えられ、母子保健室登校の子どもは母親の養育態度に影響されていることが示唆された。

#### 2. 子どものアタッチメント対象の変化

援助プロセスの第 1 ステップでは、子どもは母親に対するアタッチメント欲求が高まり、アタッチメント行動が喚起され、母親から離れられない。第 2 ステップ、第 3 ステップにおいて、母親に対するアタッチメント欲求が充足され、子どもの母子分離不安も解消された。さらに子どものアタッチメント対象が母親から養護教諭や担任に広がり、さらに級友との良好な関係へと繋がった。子どもの第 1 アタッチメント対象は、児童期に母親や母親に代わる養育者から友人へと移行する。子どもの援助者としての学校の子どもたちは、学校における重要な援助資源といえる。

#### 3. 援助者を支えた学校のサポート要因

母親の学校のサポート要因は、養護教諭の援助と担任の努力であった。担任は教職員や級友からの直接的な援助をあげていた。養護教諭は学校の組織機能、チーム援助促進の要因であった。援助者を支えた共通の学校のサポート要因は、支持的な人間関係であった。支持的な人間関係は、母子保健室登校の子どもが教室復帰に至る援助を行うための基盤であることが示唆された。

#### 4. 校長のリーダーシップ

養護教諭の学校のサポート要因である『学校の組織機能』には「校長のリーダーシップ」があり、養護教諭の援助行動は校長の影響が大きいことが考えられた。本研究では校長は、母子保健室登校を学校全体で組織的に支援することにより、養護教諭の母子保健室登校への仕事の集中や負担過多をできるだけ防ぐとともに、学校全体の援助サービスの機能を上昇させることで、すべての子どもへの援助サービスの充実を目指していたと推論できる。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本研究は小学生の母子保健室登校に関する養護教諭を中心とする援助プロセスの研究であり、実践のデータが現場の実践家でないと得ることが困難なものである。研究者は母親、養護教諭、担任の面接結果を適切に分析することにより形成した援助プロセスモデルは、不登校援助の実践にきわめて有用なものと評価できる。また博士論文の一部となった研究は「カウンセリング研究」等に発表されており、一定の評価を受けている。

平成 27 年 3 月 7 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（カウンセリング科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。